

私は幼い頃からスポーツに親しむ環境で育ち、トライアスロン愛好

Where there's a will, there's a way!!



高橋 侑子 (トライアスロン選手)

## 学園で育った同窓生

### 私的小・中・高時代

小学生時代は、子ども一人ひとりのあり様を大切に。桐朋小学校で、いつも面白く楽しい発見が溢れる中、休み時間も放課後も思いっきり外で遊んでいた記憶がある。

その頃週末は、家族で全国各地のマラソン大会へ出掛けるのが慣例で、ミニマラソンや家族リレーなどに参加し、小学二年生の時に初めてトライアスロンにも挑戦した。正直、当時のことはあまり良く覚えていないが、遊びの延長で楽しんでやっていたと聞いた。そこが私の原点である。

成長するにつれ、楽しむだけではなく、競技としてのスポーツも見えてくるようになると、気持ちだけ追込み過ぎて気分が悪くなることや、思うようにいかないことも出てきたが、子ども心に表彰台のご褒美が嬉しく、その為にどうしたら良いかと家族を交え戦略を練り試行錯誤する妙味も覚えていった。

この時期に受験勉強に囚われることなく、のびのびと過ごせたのはありがたいと思う。

中学生になって、ずっと楽しみにしていた部活動は、陸上部を選んだ。この部活の存在はとて大きく、生活全てが部活中心に進んだと言っても過言ではない。中高六年間苦楽を積み重ね、悩み泣き笑って築いた仲間との絆は、多様な学校行事を通して認め合う気持ちを育んでくれた。特に、学年全員を取り纏め、立ち向かわなければならぬ

# 創刊50号記念号

## 初等部の教育

【桐朋幼稚園】2018年4月よりはじまった三年保育  
【桐朋小学校】特色ある教育、活動  
【桐朋学園のつながり、同窓生から】

# 桐朋教育50

## 桐朋学園のつながり、同窓生から



高橋 侑子さん  
(トライアスロン選手)



石原 信輔さん  
(マリンバ奏者)



山内 美香さん  
(山内どう園経営)



千葉 裕子さん  
(桐朋女子中・高等学校校長)



吉野 圭悟さん  
(桐朋小学校音楽科講師)

一九四七年、桐朋学園として第二の出発をしました。有名な哲学者であり戦後日本の教育改革の担い手であった、東京文理科大学の務白理作学長が、男女両校の校長を兼務して、一人ひとりの人格を尊重し、自主性を養い、個性を伸長する、ヒューマニズムに立つ教育の理念を桐朋教育の基本に据えました。その「人間教育」の理想は、男子部門、女子部門、音楽部門の共通の基盤として継承されています。今回、学園のつながりとして、小学校と中学校の「ふれあいの授業」実践、小学校が桐朋学園大学音楽学部へ行き、演奏を聴かせていただいていることを取り上げます。桐朋教育の基本には、子どもたちを充実した環境でじっくり育て、人間としての無限の可能性を豊かに開花させようとする一貫教育の発想とシステムがあります。その学園で育った同窓生の声を掲載します。



2018  
TOHO GIRLS



とした。しかし、散々迷ったものの、言葉の不安もあって行動に移せず、チャンスを逃してしまった。一歩踏み出せなかった自分に少し嫌気がさし、このままでは変わらないと猛省しながらプールから滞在先に戻る途中、偶然にも再びそのコーチが一人で歩いているところに遭遇した。このチャンスを逃すわけにはいかない、と思いつつ話しかけた。つたない英語であったが、とても親切に話を聞いてくれ、帰国後メールでのやり取りを始めた。結果的には、そのチームは定員オーバーで新規加入は出来なかったが、その代わりにアメリカ、サンディエゴを拠点とする「The Triathlon Squad」というチームを紹介してもらい、二〇一七年一月より新しい生活がスタートした。ポルトガル人のコーチに、アメリカ・カナダ・ベルギー・デンマーク・イタリア・スペイン・エストニア・リトアニアの世界各国から集まった選手たち

**卒業、新たな挑戦**  
卒業後の進路を迷い、自分を試すために、短期だがオーストラリアのチームで単身修行をさせて貰う機会を得た。初めは右も左も分からず苦労したが、この貴重な経験を経て、スポーツ科学、栄養学、語学力の必要性を痛感し、新設間もない法政大学スポーツ健康学部を受験

高校生になり、U19の部一年目にして念願であったアジア選手権・世界選手権の出場権を得て、初の日本代表になった。チャレンジ精神で新たな道を切り拓き、アジアや世界の国際舞台に立てるようになる

することにした。私は三期生となり、新しい事に挑戦し、可能性を出してくれる校風の元、多種多様な事を学んだ。大学進学と共に、練習や遠征の計画・手配、ウェア、バイク等用具のスペンサー探しも自力で行い管理責任を自らに課してみた。又体育会水泳部にお世話になり、徹底的に水泳に取り組めた事も大変幸運であり、大学選手権を四連覇し、充実した大学生生活を過ごせた事は大きな副産物になった。二〇一六年、ひとつの目標としていたリオオリンピックは、納得のいかない選考結果により、残念ながら補欠というかたちで終わった。深い喪失感と虚無感。でも自分を鼓舞させ、到底納得は出来ないが、前に進むしかないという気持ちで切替え、同夏にスイスで行われた世界学生選手権で日本人初優勝を勝ち取った。そこで心の片隅で潰れかけていた自分を取返せた気がする。そこからは小さな枠にはまらず、グローバルに成長するために、独自の道を邁進しようと決意し、インターナショナルチームを模索することにした。海外には国の垣根を越えて活動するチームが多く存在する。以前から世界のトップ選手たちが国籍を問わず一緒に練習している姿を見て、興味を持っていたが、二〇二〇年に向けても今がチャンスだと判断した。



の中で全てが新鮮であった。まだ思うように英語が話せない状況だが、コーチを含め、チームメイトみんなに助けて貰いながら、切磋琢磨する日々、貴重な経験が積んでいる。一年を通して海外での生活が大半を占め、大変な事も多いが、一歩踏み出して良かったと胸を張って言える。レース戦績も、二〇一六年は一度も世界シリーズでトップ10に入ることが出来なかったが、二〇一七年は五・八・九位と三回トップ10入りし、世界シリーズランキングは三位から四位にジャンプアップした。もちろんまだ満足するような結果には至っていないが、これから先が改めて楽しめるようになるスタートであった。

**これがらも、Where there's a will, there's a way!!!**

振り返ると、多くの幸運と人々のご支援によってここまで繋げてくれた私がいる。

今後プロとして、結果を求められ、身体以上に心のタフさも増々必要となる。そして東京生まれ、東京育ちの私にとって、トライアスロン適齢期と言われる二九歳を迎えるホームタウンでのオリンピックは大きなプレッシャーも伴うであろう。しかし、それは運命と捉え、責任感や使命感と共に、より巨大なモチベーションに繋げてゆきたい。高校卒業後、大変光栄な事に桐朋の同級生やそのご家族が中心になって後援会が結成された。国内試合では、大声援に励まされ、とても心強い。「体育祭のノリだから!」と結果に拘わらず「自分たちも楽しんでるから」と桐朋らしい一体感が心が癒されている。

これからは試行錯誤の連続を糧に、次に繋げて、自分の可能性を伸ばし、ワクワクしながら新しい自分に会いたいと思う。その為にも、一瞬一瞬を無駄にせず、悔いのない日々を過ごし、そして何よりも楽しむことを忘れずに精一杯取り組んで行きたい。